

# 総評

片山和俊 | 審査委員長、東京藝術大学 名誉教授



表彰式にて

第10回を迎えた今年度、「地域の暮らし」のサブテーマを変えた。これまでの課題が難しいとの意見もあり、誰でも知っていて利用する機会がある建築にと考え「これからの地区センター」とした。そして建築の専門性を生かすように設計重視「カッコいい建築」を付け加えた。

その結果が楽しみでもあり不安でもあった。今回応募は36作品。1次審査では審査委員の採点をもとに選定を進めたが、建築に地域の暮らしがどう反映されているかという視点から選んだ結果、残った作品は8校あまりであった。残念ながら地域と地区センターの関係や、センターが立地する周辺環境との関係が捉えきれない作品が目についた。天から降ってきたようなと言ったらよいだろうか。その地域にあるという必然性が見えない形や設計の作品を前にして、不安が的中したように思われた。もしかしたら「カッコいい」が誤解を生んだかも知れない。

一方、最終審査に進んだ作品は、いずれも例年に変わらない力作であった。特に感心したのは提出されたプレゼン動画で、いずれも上手い。最終審査では、図面パネルではわからなかった計画の発想と組み立てを知ることができた。その情報をもとに図面パネルと合わせながら、トーナメント形式ではなく、8校から各審査委員が上位4校を選び、その結果をもとに選考を進めた。その結果3校が満票で一致し、残る1校を決める過程で意見交換をしながら、各賞を決定した。

優勝は群馬県立桐生工業高等学校「桐生新町重伝建に建つ地区センター」に、準優勝は山形県立新庄神室産業高等学校「私たちのまちの中心をつくる」に決まった。桐生の作品は、調査から立案そして設計まで、緻密に組み上げられた密度の濃い計画である。加えて先輩たちが長年トライしてきた計画群とのコラボを打ち出し、同じ地域で計画を積み重ねてきた広がりや厚みを感じさせ、建築甲子園10年に相応しい作品であると評価された。これまでの全作品を一同に集めてみたくなる内容であった。一方、新庄神室の作品は、地区センターとして複合化した機能の組み立ての明確さ、冬期の積雪や木材利用など風土から解いた建築構成がよかった。設計重視という今年のサブテーマによく応えているとして審査委員から評価された。ただし私の中には、ランドマークにという意図はよいとしても、周囲の環境との応答が不足していること、市役所に囲まれた市民ひろばはどうかという疑問が残っている。

他の6校のうち大阪都島第二工業高等学校の作品は、計画の着眼点と小さなスケールへの拘りに惹かれたが、引込み線の空間の活性化には、沿道両側の助けを借りてもよかったのではないかと思われた。一方、浜松工業高等学校の作品は、小粒ながらコンセプトも構成もよく、上位2校に迫る魅力があると判断して、審査委員長特別賞を贈ることとした。

総じて今回の甲子園は、設計重視とした点が明暗を分けたようである。しっかり設計をするためには、逆に地域や周辺環境との応答が鍵になると気づいて欲しかったが、難しかったかも知れない。そのことを肝に銘じてこれから取り組んでもらえたらと思っている。